

選評

森 結

オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業一四四七 - 一五〇四

—ピッコローミニ家とモナルデスキ家の市政と事業への関与をめぐる政治的背景—

本論文は、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂にルカ・シニョレリが描いた「最後の審判」主題の壁画連作について、とりわけ《アンチクリスト》の場面を中心に扱い、装飾プログラムの助言者やパトロネージ、典拠などの問題を包括的に再検討し、あらたな解釈を提案している。

同礼拝堂の壁画連作については、装飾プログラムの考案者をめぐって議論が盛んであり、またそこに込められた政治的メッセージの内容や対象についても意見が分かれている。この研究史の文脈において、すでに論者は先行研究で装飾プログラムの助言者としてピッコローミニ枢機卿すなわち後の教皇ピウス三世の秘書にしてオルヴィエート大聖堂助祭のアルベリーの関与をほぼ確定する史料の存在を指摘しており、それを前提とした本論文においては、アルベリーと彼が仕えるピッコローミニ家の関与を前提とした新たな解釈が提案されている。

論者はまず、礼拝堂装飾の出資者であるモナルデスキ家とピッコローミニ家の関係について、従来看過されていた一六世紀の史書の記述を論拠に、婚姻による両家の密接な関係を指摘する。そしてモナルデスキ家の反教皇派の一人を父とする出資者ピエトロアントニオが、教皇への恭順を示すとともに、反教皇派の父祖たちの贖罪を目的として礼拝堂装飾を構想したという経緯を、説得力をもって論証している。

論者はさらに、装飾プログラムの典拠について、従来の『黄金伝説』とアウグスティヌスの『神の国』の第二〇巻第十九章が主要なものであることを確認しつつ、ピッコローミニ家との関わり点から、『神の国』の同じ箇所と言及したピウス二世の一四五九年の演説を指摘し、それがもうひとつの典拠であることを、描かれた場面との具体的な関係において論証している。そして装飾プログラムに反映された政治的意図について、フィレンツェの政争と結びつける古典的な説やアレクサンデル六世の政策と結びつける近年の説に対し、論者はピウス二世の新十字軍構想とその甥ピウス三世の教会改革という、二人のピッコローミニ家出身の教皇たちの政策が反映されているとの新たな説を提案する。

以上のように数々の説得力のある新解釈を提案する本論文ではあるが、紙幅の制限もあり、たとえば同礼拝堂装飾における古代の詩人の肖像群の意味の問題など、今後のさらなる説明が望まれる課題もないわけではない。しかしそれらを差し引いても、本論文は、サン・ブリツィオ礼拝堂壁画連作については元より、当時の中部イタリアの美術パトロネージにおいてピッコローミニ家の果たした役割についての優れた事例研究のひとつとして、今後の研究に多大の貢献を果たすことになると思われる。

以上の点を踏まえ、森結氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。